

批評・学問・政治

——グラント・アレンに見る 1870 年代～1890 年代イギリスの言説力学

鈴木英明

ワイルドが活動していた時代の文学ジャンルとしての「批評」は、それ自身の歴史を持ちながらも、当時の様々な知的言説との相互関係の中で存在していたはずだ。そうした知的言説の中でもっとも影響力を持っていたのは、言うまでもなくダーウインの進化論であり、スペンサーの社会学的進化論だった。実際ワイルドも、オックスフォード時代にスペンサーの *The Study of Sociology* (1873) や *First Principle* (1875) に関する読書ノートをとっている。また、Bruce Haley は、次のように指摘している。スペンサーは、「社会は有機体と同じではないが類比的であり、あらゆる社会と有機体は、成長するにつれて個別化、複雑化していく」と述べており、こうしたスペンサーの考え方は、ワイルドの特に “The Rise of Historical Criticism” に影響を与えている、と。ところが奇妙なことに、“The Decay of Lying” では、スペンサーの名前が否定的に言及されている。ワイルドのスペンサーに対するこうしたアンビヴァレントな態度は何を意味しているのだろうか。

ここで参考になるのが、Ian Small による、19 世紀イギリスの最後の約 30 年間における、「批評」を取り巻く知的言説に関する見取り図である。スモールは、この時代の知の言説に地殻変動が起きたと指摘し、これを説明するキー・ワードとして、「専門化」、「制度化」、「権威」を挙げている。経済学、歴史記述、社会学、文学などの当時の様々な言説において、「専門化」と「制度化」が、つまり「大学化」、「学問化」が進み、そうした大学、学問にこそ知の権威が置かれるようになったとスモールはいう。歴史記述を例にとれば、19 世紀の中葉までは、マコーリーに見られるように、歴史記述は文学的、哲学的な性質の強いものだった。しかし、その後のドイツの歴史学の導入により、原資料や “fact” や “evidence” を重視する客観的・学問的な歴史記述が支配的になった。この影響を受けたのが文学批評である。文学批評もしだいに専門化・制度化されてアカデミックな言説となり、そうした文学批評の知的権威を支えたのは、すでに学問分野として確立されていた歴史学だった。他方、そうした制度化の外に追いやられた文学者、あるいは制度の内部で周縁化されていった文学者は、自らの知的権威を「個人」、あ

るいは個人の感覚・印象の中に求めることになっていく。以上がスモールによる見取り図である。

では、当時の批評家は、複数の言説に共通して見られる上記のような変動をどのように受け止めていたのだろうか。この点を調べるのに、Grant Allen (1848-99) のテキストは恰好の資料となる。というのは、アレンは51年という短い生涯の中で、科学を含む多様な言説に関わるエッセイを書き散らしながらも、文学、科学、哲学等々の歴史に特別の刻印を残すほどの特殊性を持たず、それゆえに彼のテキストは、その時代の様々な言説をストレートに反映する鏡のような働きをしていると思えるからだ。そして、先に指摘した文学批評の専門化、学問化という問題をアレンが正面から論じている評論が、1882年に *The Fortnightly Review* に発表された “The Decay of Criticism” である。

“The Decay of Criticism” は、フランスの雑誌『両世界評論』に掲載された Caro という批評家の評論を紹介するという形をとっている。哲学者で文芸批評家の Elme-Marie Caro (1826-87) は、パリ大学教授、アカデミー・フランセーズ会員を務めた人物で、オーギュスト・コントラの *positivism* に反対する論客として知られていた。ということは、カロは、スペンサーを師と仰ぐアレンとは思想的に対立するはずなのだが、アレンはカロのことを「批評家の中の批評家」とさえ呼んでいる。ともかく、アレンが紹介しているカロの評論は、当時のフランスの批評をめぐる問題点を指摘したものである。アレンの要約によれば、カロが指摘する問題点は主に次の二つだ。第一に、ジャーナリズムの肥大化による批評の質の低下である。アレンはこれを受けて、まだフランスほど深刻ではないが、同じような問題がイギリスでも起きつつあると述べ、こうした批評の質の低下を “this decadence of newspaper criticism” (DC 349) と評している。カロが指摘するフランス批評の問題点の二つ目、すなわち「専門化」が批評にもたらす弊害は、先ほどのスモールによる見取り図との関連で特に重要である。

Now, specialism is full of attractions for mediocrity. There, a small man may easily reign supreme within his own petty realm. He can make his private microscopic discoveries, and gain kudos for them at the cheapest possible rate.

Well, we cannot deny that we in England are somewhat menaced by precisely the same danger. At Oxford to-day, specialism is rampant (DC 350).

ここでアレンが伝えるカロの主張を言い換えれば、批評家は、狭い専門領域に自

閉することなく領域横断的に言論活動を行うべきだということになる。こうした批評家は、現代においてはエドワード・サイードのいう「知識人」の姿に重なる。しかし、カロのいう批評家は、ナショナリスティックな性格を帯びている点でサイードの知識人とは異なっている。

We want to make ourselves into *Germans off-hand*, and we only succeed in losing our national virtues and becoming very second-rate Frenchmen after all. Yet they were surely well worth preserving, when one comes to think on it, *these essentially French characteristics that we are trying to exchange for second-hand German specialism* (DC 350, 強調は引用者による).

このように、フランスにおける批評の衰退の主たる原因の一つであった “specialism” が、いつのまにかドイツと重ねられ、フランスの国民性がドイツ化されないようにすることが批評の衰退を食い止めることであると考えられている。ここには当然、1871年の普仏戦争での敗戦とドイツ帝国の躍進という政治的状況が反映されているわけだが、ここにこそ、批評と学問をめぐる言説が民族・国民性をめぐる言説へとシフトしていく瞬間が垣間見られる。こうしたカロの論述に対するアレンの反応も興味深いものだ。

Let us be Frenchman still, and don't let us lose our national individuality in the arid and dreary specialism of the new school, imported smoking hot to Paris from the lecture-rooms of Berlin.

Is there not in all this a certain lesson for us Englishmen as well? Are not we, too, a little over-anxious to convert ourselves forthwith into the image of the fashionable Teutonic monographist? Are we not too apt to forget that England also has by native inheritance her great and invaluable mental qualities.? (DC 350, 強調は引用者による).

アレンはここで、カロの口吻が移ったかのように、批評のチュートン化すなわち “specialism” を戒め、イングランドの国民性を想起するように呼びかけている。要するに “The Decay of Criticism” という評論においては、批評状況に関するイギリスとフランスの類似性が、反ドイツという政治状況に関するイギリスとフランスの類似性に重ねられ、批評の衰退を食い止める方策としてナショナリズムが顕

揚されているのである。

さて、ワイルドにも関係があり、また反ドイツ、反チュートンという意味でも興味深いアレンの評論に、“The Celt in English Art”がある。これは、1891年に、ワイルドの“The Soul of Man Under Socialism”と同時に*The Fortnightly Review*に掲載された。(ちなみにワイルドはこの評論を読んで喜び、アレンに手紙を書いている。)この評論の特徴は主に二つある。第一には、イギリスの芸術におけるケルト的要素を論じる際に、比較の対象としてチュートンの要素が取り上げられ、比較民族学的な論考になっていることだ。第二には、これが芸術論であると同時に政治論でもあるという点である。そして、これら二つの特徴を合わせて考えると、またしても反ドイツという政治的含意が浮上してくる。

アレンは、イギリスの芸術におけるケルト的要素の対立項として、チュートンの(ドイツ的)要素を置き、この大きな対立軸の下に、芸術に関する他のいくつかの対立概念を振り分けていく。こうした比較対照は、あくまでも芸術のタイプに関するものだが、ケルトの芸術性を論ずることが政治と不可分であるということとは、このエッセイの冒頭から明確に示されている。

The return-wave of Celtic influence over Teutonic or Teutonized England has brought with it many strange things, good, bad, and indifferent. It has brought with it Home Rule, Land Nationalization, Socialism, Radicalism.... It has brought fresh forces into political life—eloquent young Irishman (CEA 267).

また、次の引用では、芸術におけるケルト的要素が、民主主義や言論の自由、人間の平等といった政治理念と結びついていることが主張されている。

It [the decorative movement] is a direct result, I believe, of the Celtic reflux on Teutonic Britain, and of the resurgence of the Celtic substratum against Teutonic dominance.... The Celt comes back upon us with all the Celtic gifts and the Celtic ideals—imagination, fancy, decorative skill, artistic handicraft; free land, free speech, human equality, human brotherhood (CEA 272).

このように、アレンはケルト的要素の方のみを政治に結び付けているのだが、その結果として、“Teutonic Britain”や“Teutonic dominance”という言葉も否応なく政治性を帯びることになる。つまり、チュートンのものは、非民主的な政治、言

論の統制、人間の不平等などの否定的意味を負荷されてしまうのだ。アレンは、“German”という言葉を慎重に避け、「チュートンの芸術」という言葉はドイツの芸術を意味するわけではない、と苦し紛れに弁明しているが、以上のように見てくると、このエッセイの政治的含意は明らかだ。それはつまり、イギリスは表面的にはドイツ化しており圧制が行われているが、この国の深い層にはケルト的な自由の流れがあり、その豊かな流れが芸術=政治運動として今表面化しつつある、ということである。

ここで、先ほど取り上げた評論“The Decay of Criticism”とこのケルト芸術論とを関係付ける二つの点を補足しておきたい。まず、先ほどの“specialism”ないしはアカデミズムの問題だが、このケルト論では、「絵画の領域における新たなケルト的・民主主義的精神は、“the bourgeois Teutonicism of established academic art”に反抗する」と述べられている。そして、フランスとの関係についていえば、フランスは“Celtic France”として、ケルトの側の国として言及されている。

以上のように、アレンの二つの批評テキストを並べて読むと、批評や芸術を論じる筆が、最終的には反チュートン、反ドイツという政治的言説を形成する力に巻き込まれていく様子がわかる。ここに、先ほどのスモールの見取り図を重ね合わせれば、ある種の文学者たちを周縁化していった、知的言説の「専門化」、「制度化」の波はドイツ化の波であり、それに抗う批評的立場は、批評家本人の意図とは無関係に、「反ドイツ」という国際政治の力学に巻き込まれていた可能性がある、という仮説が成り立つ。この報告の冒頭で触れた、スペンサーに対するワイルドのアンビヴァアレントな態度も、以上のような言説の渦にワイルドが巻き込まれていたことの徴候といえるのではないだろうか。

Bibliography

- Allen, Grant. “The Celt in English Art.” *The Fortnightly Review* 55 1891: 267-77.
 —. “The Decay of Criticism.” *The Fortnightly Review* 31 1882: 339-51.
 Haley, Bruce. “Wilde’s ‘Decadence’ and the Positivist Tradition.” *Victorian Studies* 28 Winter 1985: 215-229.
 Small, Ian. *Conditions for Criticism: Authority, Knowledge, and Literature in the Late Nineteenth Century*. Oxford: Clarendon Press, 1991.
 Wilde, Oscar. “The Decay of Lying.” *The Artist as Critic: Critical Writings of Oscar Wilde*. Ed. Richard Ellmann. Chicago: U of Chicago P, 1982. 290-320.
 —. *Oscar Wilde’s Oxford Notebooks: A Portrait of a Mind in the Making*. Ed. Philip E. Smith and Michael S. Helfand. New York: Oxford UP, 1989.